

橋本朝生編

大花虎光本狂言集
一

古典文庫

橋本朝生編

江苏工业学院图书馆
藏书章

大
今
狂言集
一

古典文庫

平成二年十月二十日印刷発行

非売品

集言狂本光虎蔵大

一

編者 橋本朝生あきお

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	七
卷一	二
末広かり	三
竹生嶋参り	二七
祐膳	三四
素袍落	三八
福の神	五
牛馬	六
栗田口	七五

朝比奈……………九五

鏡男……………一〇二

花折……………一〇九

卷 二……………一二三

麻生……………一二五

しびり……………一四〇

楽阿弥……………一四五

三人片輪……………一五〇

米市……………一六四

二人袴……………一八〇

入間川……………一九二

不腹立	二〇四
栗焼	二二四
清水	二二三
卷 三	二三三
目近	二三五
いろは	二五〇
二千石	二五四
吃り	二六四
骨皮	二七一
八幡前	二八五
昆布売	三〇二

鈍太郎	三二五
柿山伏	三八
髭櫓	三四
卷 四	三四三
三本柱	三四五
文蔵	三五二
蛸	三六三
縄なひ	三六六
千鳥	三八二
雁厂金	三九三
口真似	四〇六

御茶水……………四三

長光……………四三

空腕……………四三

凡例

一、本書は、大蔵流八右衛門家七世虎光の狂言本全十六巻を、転写本によって、四冊に分けて翻刻するものである。

一、巻一―四は、文政六年山岸清斎書写大蔵虎光本（吉田幸一氏蔵）を底本とし、文政五年岡田信言書写明治四十一年橋本賀十郎転写大蔵虎光本（関西大学図書館蔵）との本文異同を示す。ただし、巻二の後半五曲は岡田信言書写本には欠けている。

一、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して次のような処置を施す。

- 1、段落を適宜設ける。
- 2、謡い物のゴマ点は省略する。コトバとフシを区別するため、各役のはじめの肩鉤（ゝ）を、コトバの部分はフ、フシの部分はへに改める。
- 3、文字遣いは底本通りとし、混用されている片仮名もそのままとする。

4、漢字の異体字や旧字体は通行の字体や新字体に改めるが、一部特殊なものを残す。

(例) 哥 寫 嶋 附 餘 厂 广 艸

5、特殊な合字・連体字は通行字体に改める。

(例) 𠂇↓より 一と↓こと

6、当て字・誤字も原則としてそのままとし、意味のとりにくい場合には適宜正しい表記をへゝで括って傍記する。

7、字体の紛らわしいものは、文意によって判断する。

(例) 刀・力、矢・失、鈍・純、貝・具、結・詰、折・打、最・宛

8、送り仮名は小字で記されることが多いが、区別しない。

9、反復記号もそのままとするが、片仮名の反復にしばしば用いられる「と」は「、」に改める。

10、ト書き等は割注で記されることもあるが、すべて一行書きとする。

11、欠字・判読不能文字は□を当てる。

12、謡い物の部分は、一句で一字空ける。この点について山中玲子氏のご協力を得た。

13、各巻題簽の曲名のうち数曲に合点が施されているが、朱によるものである。

14、一部に朱によって読点「、」が加えられており、これはそのままとするが、大部分には読点がないため、句点「。」を加える。ただしこれは上演の際の息つぎを示すものではない。また各役の終りは省略する。

15、また朱によって（まれに墨でも）、振り仮名・送り仮名・訂正が加えられており、これらは本文右傍に示す。濁点・半濁点を付すもの、削るものも振り仮名の形で示す。見せ消ちは傍線を施す。ただし圈点や欄外注記は省略する。

16、役名を補ったり読みを示したりするなど、校訂者が補記するものはすべてへゝで括って区別する。

一、本文異同は、文字遣いについては示さず、発音された状態で相違する場合に（一）に入れて示す。役名・コトバとフシの相違も同様に示す。また次のよ

うな処置を施す。

1、清濁の相違、連声になるかどうか、反復記号の相違・回数、同時に発せられる「重白」の順逆、当て字、役名の異表記、ト書きの異表記などについては異同を示さない。

2、相違する語句の前の同一語句から引くことを原則とするが、明らかに置換可能のものはその語の直後に記し、不明確なものは相違該当箇所の上を一字分空ける。当該箇所のないものは（ナシ）とする。

3、曲名については、文字遣いまで含め、相違する場合は全形を示す。

すえ広かり
竹生島参り
祐せん
素袍落
福の神
牛馬
栗田口
朝比奈
鏡男
花折

壺

〈題
簽〉

末広かり

シテ「大果報の者で御座ル、天下納リ目出度御代で御座れば、此間のあなた此方の御参会ハ夥敷事で御座ル、夫ニ付夫等^某も近日一族衆を申入ふと存ル、亦上座ニ御座ル御宿老へハ末広かりを進上^サ申うと存ルが、身が道具之内ニ左様之物が御座るか、太郎官者を呼出シ承ふと存ル、ヤイ／＼太郎官者居^ルかヤイ 太良「ハア、シテ「居ルか／＼ 太良「ハア、シテ「居たか 太良「御前ニ居舛ル シテ「念のふ早かつた、（念なふ早かつた先立テ 太良「畏て御座る シテ「）汝を呼出ス事別成事でも無い、天下納リ目出度御代なれば、此間のあ方（あなた）

此方の御参会ハ夥敷ことでは無イか 太郎「御意の通り夥敷事で御座
リ舛ル（御座る） シテ「夫よく〱扱夫等も近日一族衆を申入ふと思
ふが何とあろふぞ 太良「御意無^ッバ申上ふと存ル処に一段とよふ御座
りませう シテ（ナシ）「よかるふ 太良「中〱 シテ「夫なればとて
もの事二、上座ニ御座ル御宿老二（御宿老へは）末広がりを進上申う
と思ふが、身が道具の内ニ末広がり有ルか 太良「御道具ハ悉存て
居舛ルが、末広がり申^ヌ物ハついに見た事も御座りませぬ シテ「し
かと見ひでな 太良「イヤ御座りませぬ シテ「ム、（ナシ）汝が知
らすハ有ルまい、何として能^{カク}ふぞ 太良「何と被成てよふ御座りま
せうぞ シテ「イヤ都ニハ有るか 太良「何が扱広イ都の事で御座レ
バ無と申事ハ御座リ舛まひ シテ「夫なれば汝ハ太義乍、今から都へ